

図 1.1 調査位置図(縮尺:フリー)

表 4.1 調査地の地質層序

地質時代	地層区分 (地層記号)		主な土質 (主な色調)	N 値 (平均)	分布や層相
完新世	盛土層 (B)		粘性土 コンクリート, 瓦礫 (暗褐)	1~3 (2.1)	調査地全域に分布する盛土層。シルトやローム等の粘性土を主体とする。 コンクリートや砕石が主体となる部分もあり, 今回の調査地点では表層部にレンガ片を非常に多く混入した。 層厚は 1.65~4.15m を有する。
	沖積粘性土層 (Ac)		ローム 砂混じり粘土 シルト (黄褐, 黄灰)	1~3 (2.6)	今回 NB-1, 既往 No.B01 地点のみで確認された粘性土層。 上部はやや不均質なロームを主体とし, このロームは二次堆積したものと推定される。 下部は粘土やシルトを主体としており, 細砂を混入する。層厚は 5.50~6.05m を有する。
新生代 第四紀	東京層	第一砂質土層 (Tos1)	粘土質細砂 シルト質細砂 一部, 砂質シルト (黄褐, 黄褐灰)	6~15 (10.6)	内閣府街区内において連続して分布するが, Ac 層が分布する街区東側では層厚が薄い, もしくは欠層となっている。 粒径は均一で全体にシルトを多く混入し, 部分的に粗砂や軽石を混入する。 層厚は 1.30~8.10m を有する。
		第二砂質土層 (Tos2)	細砂 シルト混じり細砂 (黄褐灰, 褐灰)	11~49 (20.4)	調査地全域に連続して分布する砂質土層。 不規則に中砂を混入し, 粒径は不均一である。 硬質なシルトを薄層状に挟む部分もある。 層厚は 5.70~6.80m を有する。
		第三砂質土層 (Tos3)	細砂 (黄褐灰)	21~86 (47.6)	調査地全域に連続して分布する砂質土層。 粒径は細かく均一であるが, 硬質なシルトを薄層状に挟む部分もある。 φ5~15mm 程度の角礫を混入する中砂を薄層状に挟む。 層厚は 2.05~4.45m を有する。
		粘性土層 (Toc)	粘土, シルト 火山灰質シルト (黄褐, 暗灰)	5~60 (21.6)	調査地全域に連続して分布する粘性土層。 地層上端部の Tos3 層との境界付近 0.20~0.50m 間程度は非常に硬質なシルトである。 細砂を小ブロック状に混入し, 軽石を混入する部分もある。 層厚は 1.35~2.70m を有する。
		第四砂質土層 (Tos4)	細砂 (暗灰, 暗黄褐)	15~62 (35.5)	薄い層厚で不連続に分布する砂質土層。既往 No.B02 地点では欠層となっている。 粒径は不均一で粗砂を混入する。 粘土や礫を混入する部分も多く, 全体に不均質である。 層厚は 0.50~2.10m を有する。
		礫質土層 (Tog)	砂礫 (暗灰, 黄褐灰)	39~150 (94.8)	調査地全域に連続して分布する礫質土層。 礫は φ5~20mm 程度の亜円礫~亜角礫を主体とし, 最大径は φ40mm 程度である。 礫間は粒径不均一な中砂~粗砂が充填しており, 非常に密に締まっている。 所々で細砂を薄層状に挟んでいる。 層厚は 5.35~6.20m を有する。
	江戸川層	第一砂質土層 (Eds1)	細砂 (暗黄灰)	82~113 (97.2)	調査地全域に連続して分布する砂質土層。 粒径は細かく均一で, 硬質なシルトや亜円礫を部分的に混入する。 非常に密に締まっている。 既往 No.1 (H20.9) 地点では 20.35m の層厚が確認されている。

※この地質層序表は, 建物計画地直近の計 4 箇所(今回:NB-1, 既往:No.B01, No.B02, H22-3)のボーリング調査結果を整理したものである。

※N値 50 回以上もしくは貫入量 30cm 以上の実測 N 値については, 換算 N 値を求めてとりまとめた。(詳細は 4.3 節参照)

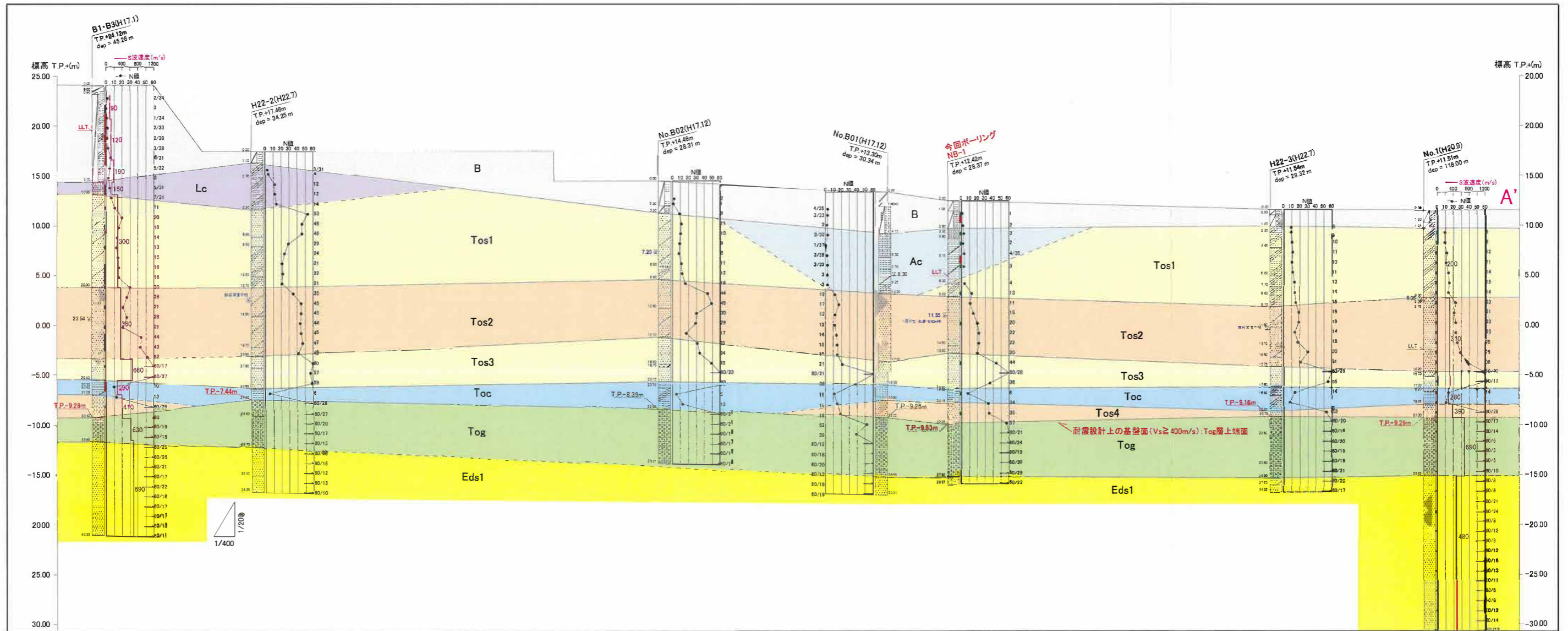


図 4.2 地質想定断面図(縦横比=1:2, 縮尺:フリー)